

3) 予測結果

飛行場の施設の供用に当たり、環境保全措置として、施設からの排水はCOD濃度を15mg/L以下に処理した後、約110m³/日の量で轟川に放流する。

飛行場の施設からの排水は0.001m³/s、轟川の流量は0.2m³/sであり、飛行場の施設からの排水が海域における流速、水温、塩分の変化は極めて小さい。

海域のCODは現地調査において0.3~1.7mg/Lの範囲にある。飛行場の施設の供用後において、CODの総負荷量は約2.1kg/日であり、CODの予測結果より現況からの変化は轟川河口域に限られ、最高でも0.02mg/L以下と極めて小さいと予測される。

さらに、飛行場施設の照明は、事業実施区域内の照明を目的としており、直接海浜を照らすものではない。駐車場の照明については、駐車場面最大30lx程度で計画されており、海浜まで約300m離れ、照度が減衰すること、間には防潮林もあることから、駐車場照明が海岸域（海浜）を直接照らすことはないものと予測される。また、エプロン照明、ターミナルビルの照明も事業実施区域内における照明であり、駐車場同様、海浜から離れており、間には防潮林もあることから、直接照らすことはないものと予測される。海浜部に最も近い空港北側の進入灯は、上空に向けて照射しており、海域へは防潮林により遮られることから直接照らすことはないものと予測される。

また、地下水については、海岸線に近い地点で、現況状態との水位予測値の差は最大でも0.15m以内に収まり、特に降水量が減少し全体に水位が低下する期間には、その差はほぼ0.1m以内に収まり、塩淡境界の変化などはほとんどないものと予測される。

以上のことから、海域生物の生息環境に及ぼす影響は極めて小さいものと予測される。この結果を踏まえ、海域生物について以下のとおり予測した。

(1) 主な海域生物に係る生物相の状況

① 植物プランクトン

植物プランクトンは、水中の栄養塩類を吸収して光合成を行うことにより増殖するが、飛行場の施設の供用に伴い海域へ負荷される栄養塩によって濃度が変化した場合、その増殖に影響が及ぶことが考えられる。

しかし、飛行場の施設の供用に伴い海域へ負荷されるCODの影響は、轟川河口に限られ、その程度も現況の<0.5~1.7mg/Lに比べ、0.01~0.02mg/Lと極めて小さいことから、急激な植物プランクトンの増殖が起こるといったことはなく、植物プランクトンの出現状況の変化はないものと予測される。

② 動物プランクトン

動物プランクトンは、水中の植物プランクトンや有機懸濁物をろ過して捕食する種類が多いため、飛行場の施設の供用に伴い海域へ負荷される栄養塩が著しい場合、植物プランクトンの出現状況の変化に伴う摂餌活動に影響が及ぶことが考えられる。

しかし、飛行場の施設の供用に伴い餌料対象である植物プランクトンの増殖といった出現状況の変化はなく、海域へ負荷されるCODの影響は轟川河口に限られ、その